

音楽大学生のヴィジョン

— 傾向性の調査 —

酒 井 醇

1. 調査の意図

今日の我国の音楽事情からみて、音楽大学の教育実績即ち音楽大学卒業者の活動が、いろいろな点で、社会の音楽諸活動の上に重要な役割を果していることは否めない。特に、彼等が公的・私的各種の教育活動を通じて、次の世代に影響を与えてゆく力は極めて大きいと言わねばなるまい。そのような彼等が、現在音楽大学生として一体どのように考え、何を目指し、如何なる状況で学習に従事しているか、等について、筆者はかねがね何がしかの認識を得たいと考えてきた。

一方、昨今のわれわれの周囲はおしなべて、嘗てない程の音楽教育的隆盛を謳歌しているかに見えるけれども、仔細に検討すればそこには幾多の問題点がひそんでいるようにも思われる。或いはむしろ、多くの面で、以前に比べて発展充実しているというよりは、相変らず基礎的な面の確立や根本的な改造をすら要する状況にあるとも言えるのではなからうか。

そのためにも、まず各種の音楽教育学的研究・調査が、その根柢的段階から必要であるように思われる。この種の研究のための、種々の基礎資料的調査の一つとして、近畿地区の音楽大学生全般に亘る動向調査を試みた。なお、特に音楽大学生の場合、彼等自身 被教育者であると同時に、近き将来に音楽教育の大きな担い手ともなる、という二重の関連において、各種の調査に対応する多様性が考えられる。ここでも、単に彼等の音楽諸事象に対して示す反応（受動的立場）に留らず、音楽乃至教育活動に対する能動的な姿勢や見解に関連があると思われる項にもふれてみた。

2. 調査の内容

調査項目設定の主眼を次のような点においた。

- (1) 特殊の事項の詳細調査よりは、種々の項目を広く（むしろ総花的に）採りあげる。
- (2) それらが大別して
 - (i) 音楽学生の入学前の学習経験や卒業後の方針について
 - (ii) 音楽学生の現状について……音楽大学カリキュラムに関する事項及び各自の一般的音楽経験や興味の傾向

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

- (iii) 音楽学生のヴィジョンについて……音楽社会に対する彼等の見解や芸術観・人生観及び社会的関心などについての若干。
- (3) 調査の主題としては次の五つを予定した。
- (i) 音楽大学生の全般的傾向
 - (ii) 1年次生から3・4年次生への傾向性の推移
 - (iii) 専攻別傾向性の相異
 - (iv) 男子学生と女子学生との傾向性の相異
 - (v) 男女共学校と女子大学との傾向性の相違。なお、上記(i)については、音楽大学生として一応充分の経験を得ているものとして、主として3・4年次生を対象とした。
- (4) 回答に際して出来るだけスラスラと記入出来るような事項に限り、項目の分類や記述は概して常識的な示し方をとった。

なお、今回は特に立入った統計学的操作や処理を予定することなく、各事項毎に、調査主題に対応する単純な割合を見るに留めた。したがって、今後更に調査を展開する場合には、例えば、諸項目のデータの相関々係はどうか、過去から現在にかけての或傾向の者が更に将来に対してどのような志向性をもつか、といったことの調査や或種の追跡調査なども必要と思われるし、また、音楽大学生の一般大学生に対する特異性とか、更に調査の地域を拡大して全国的状況の認識を遂げること、なども考えられると思う。

3. 調査の実施

調査時期……昭和40年9月

調査対象……関西(京阪神)地区所在の音楽大学及び大学音楽学部(学芸大学の特設音楽課程、独立部門たる音楽専攻を含む)の全部である7校について1・3・4年次生(但し内1校は短大で、その2年次生は3年次生に準ずるものとして取り扱った。)

アンケートの回答回収数……1年次生=284名(在籍総数の約75%)、3・4年次生=355名(同上の約51%……バランスを考慮して、特に学生数の多い1校4年次生を意図的に除外した数を差引いての割合は約63%となる)

年次別・専攻別回答数一覧表

次 年 専攻別	I 回 生					Ⅲ・Ⅳ 回 生					I・Ⅲ・Ⅳ 回 生 合 計					
	作	声	ビ	弦	計	作	声	ビ	弦	計	作	声	ビ	弦	計	
A 大学	男0/0女	2/5	0/8	8/5	10/18	1/0	2/15	1/9	1/5	5/29	1/0	4/20	1/17	9/10	15/47	
B ♫		1/0	3/8	0/12	3/3	7/23	0/0	4/9	1/8	6/0	11/17	1/0	7/17	1/20	9/3	18/40
C ♫		1/0	6/22	3/39	5/5	15/66	1/1	4/28	4/36	3/6	12/71	2/1	10/50	7/75	8/11	27/137
D ♫		0	23	22	7	52	0	12	14	1	27	0	35	36	8	79
E ♫		0	2	9	3	14	0	4	16	5	25	0	6	25	8	39
F ♫		0	8	10	3	21	0	13	22	3	38	0	21	32	6	59
G ♫		4	29	21	4	58	20	45	41	14	120	24	74	62	18	178
計		2/4	11/97	3/121	16/30	32/252	2/21	10/126	6/146	10/34	28/327	4/25	21/223	9/267	26/64	60/579
男女合計		6	108	124	46	284	23	136	152	44	355	29	244	276	90	639

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

- (注) 1. <作曲>専攻中には<音楽学>専攻を含めた。又<ピアノ>は、同じ器楽専攻ながら、数的に大きな比重を占める現状にかんがみ、<弦管打>と分けて独立して扱った。
2. すべて分数の分子は男子、分母は女子を表わす。(D.E.F.G大学は女子大学)
- なお、回答に際しての次の如き注意書きをほどこした。
1. 氏名、学年、専攻、男女別を明記のこと。(氏名は「記載責任」の意味であって、公にするものではありません。)
 2. 出来る限り思惑ぬきで卒直に、現状ありのままに、自分一人で答えて下さい。(なるべくペンで)
 3. 記入の仕方
 - i. マークは、該当する項の数字に○(まれに指示する△も)をつけること。
 - ii. 各問い(大項目A, B, C~)について、まず中項目(1, 2, 3~)のうちから該当のものを選び、次にそれだけについて更に小項目(イ, ロ, ハ~)から選ぶこと。(細目(1), (2)~もこれに準ずる)
なお、特に〔2項目まで可〕の如き断わりのあるもの以外はすべて各1項目に限る。
 - iii. 空白の()内には、該当するものがあれば記入のこと。

4. 調査項目の概要

- I 音楽大学入学前の経歴について(学習歴や音楽大学志望の目的) 実技を始めた年令や早期教育を受けた経験の有無、入試科目の難易度や志望の理由など7項目。
 - II 専門的学習に対する現在の体制
実技の学習時間や学習方針、諸教科の興味度など6項目。
 - III 卒業後の方針
方針として考えているコースの種別や自己本位の教養主義的立場などについて2項目。
 - IV ヨーロッパ音楽で特に興味のある(好きな)もの
時代別、ジャンル別、地域別、敬愛(傾倒)する邦・外国作曲家名など5項目。
 - V 現代音楽や非ヨーロッパ音楽への関心
現代音楽、前衛主義的音楽、我国伝統音楽、民俗(族)音楽などについて6項目。
 - VI いろいろな音楽上の経験について
各種音楽の鑑賞経験度や放送聴取率など6項目。
 - VII 現在の日本の音楽事情に対する関心や見解
創作活動、演奏活動、評論活動、教育事情などについて6項目。
 - VIII 芸術一般についての関心や見解
諸芸術への興味や芸術の意義に関する考え方など4項目。
 - IX 読書傾向について
読書量、興味をもつ作家や書物、音楽雑誌や音楽書類の閲読状況など4項目。
 - X 一般社会的関心などについて
国際状況や日本の政治・社会の動きへの関心、自身のコンプレックス(不安や重荷)の傾向、宗教に対する考え方など5項目。
- 以上計51項目(質問項目・内容の詳細は以下の各表を参照されたい。)

5. 調査の結果

各項目についての集計結果を以下の各表（夫々の番号はアンケートの項目番号をそのまま附けた）に示し、夫々若干の解釈・判断しうるところを附記した。なお、百分比は、少数のものについては記入を省略したので、人数を総ての欄に併記した。特別のものを除き、数字のみのものは人数を表し、百分比のものには%を附した。

I 音楽大学入学前の経歴について（学習歴や音楽大学志望の目的）

A 現専攻実技の勉強を正規に始めた時期（開始後1～2年の断続は無視して可）

専攻 開始の時期	作		声		ピ		弦 管 打		計
	学令前から		2		37 13%	7			
小 1 から		0		23 8%	151 55%	9 10%		32	
2 "		2		32 12%		6		40	
3 "		1		25 9%		5	↑ ※3	31	
4 "		4		34 12%		6		44	
5 "		2		16		7		25	
6 "		4		16	5		25		
中 1 から		9		16	7		32		
2 "		15	} ※2	13	4		32		
3 "	1	32 13%		11	6		50		
高 1 から	1	46 19%	} 計 70%	22	7	↓ ※4	76		
2 "	3	68 28%		18	10 11%		99		
3 "	6	55 23%		8	10 11%		79		
高卒から	2	2		0	0		4		
無回答	16※1	1		5	1		24		
合計	29	243		276	90		639		

△ I・II・IV年の合計——男女共▽

※ 1 音楽学専攻者の多くが回答をまよったもの思われる。

※ 2 音楽高校への声楽志望者が約%を占める。（I, D項の割合からみて）

※ 3, ※ 4 低学年は殆どヴァイオリン志望, 高学年は殆ど管楽器志望

開始時期の早い遅いは、声楽とピアノとで全く対立的な相異を示し、特にピアノ専攻に於て小学校の中・低学年以前の開始が過半数を占める。なお、「とにかくピアノを習い始めた時期」としては、次表IBの方が実状に合っていると考えてよからう。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

I. B ピアノを正規に習い始めた時期（ピアノの前段階としてやったオルガンを含む）

△ I・III・IV年の合計——男女共▽

専攻 開始の時期	ピ ア ノ			ピ ア ノ 以 外			全体の計 (男女共)
	男	女	計	男	女	計	
学令前から	1	38	39 14%	1	7	8	47
小 1 から	2	35	37 13%		14	14	
2 〃	2	35	37 13%	1	12	13	53人 15%
3 〃		37	37 13%	2	16	18	
4 〃		42	42 15%		29	29 8%	75人 21%
5 〃		23	23 8%	1	26	27 7%	
6 〃	2	14	16		19	19 5%	
中 1 から		16	16	2	48	50 14%	63
2 〃		8	8	2	30	32 9%	
3 〃		5	5	3	29	32 9%	114人 31%
高 1 から	2	5	7	7	42	49 13%	
2 〃				11	20	31 9%	31%
3 〃				18	16	34 9%	
高 卒 から				2		2	2
無 回 答		9	9	1	4	5	14
合 計	9	267	276	51	312	363	639

ピアノの早期教育経験者の高率であることは明かであるが、ピアノ専攻以外のものでも、小・中学生の間にピアノの学習に注がれる精力は極めて大きく、全体として幼少期における音楽教育の在り方、特にそのピアノ技術教育のあり方が、一つの重要問題であることを痛感させられる。

C 中学校入学までに早期教育——いわゆる音感教育・ソルフェージュ教育など——を受けた経験（その後中学生まで続けた年数を含めて）

△ I・III・IV年の合計——男女共▽

経 験 年 数	作		声		ピ		弦 管 打		計
	年	間	年	間	年	間	年	間	
1 年 間	1	15	11	2	29	} (内74%)			
2 〃		9	14	3	26				
3 〃		3	8	3	14				
4 〃		1	6	1	8				
5 〃	1	4	1	4	10				
6 〃		1	2		3				
7 年 間 以 上		1	1	1	3				
計	2	34 14%	43 16%	14 16%	93 15%				
やればよかったのと思う	19	143	155	53	370 (内68%)※	} 経験の有無の割合			
特にそうは思わない	3	46	55	17	121 (内22%)				
上の何れとも判断がつかない	1	11	13	6	31				
意 見 不 明	2	9	7		18				
計	25	209 86%	230 83%	76 85%	540 85%				
無 回 答	2	1	3		6				
合 計	29	244	276	90	639				

※ ⅥD表（その2）と対照されたい。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

専攻別の差は殆ど見られない。今日、特に大都市地域ではかなりゆき亘っていると考えられる、所謂音感・ソルフェージュ早期教育について、経験の有無の割合が15%対85%であることは注目に価する。しかも、有経験者中大部分が1、2年乃至3年間程度であること。又、未経験者中の約7割が、後悔を示してはいるものの、後出のⅧD表(その2)の如く、大多数が少くとも或程度の疑問視観をもつことと考え合せると、此の間の事情については、充分の検討が要るものと思われる。

- I. D どこから進学したか
1. 一般高校……イ、普通科(進学コース)から ロ、同(家庭科コース)から
 2. 高校職業課程から
 3. 高校音楽課程(音楽高校)から
 4. その他()
- 記載を省略。

E 小・中・高校でうけてきた普通の音楽教育は、現在の自分からふり返ってみて

△ I・Ⅷ・Ⅳ年の合計——男女共▽

1. たしかに役に立ったと思う	121	19%
2. 潜在的に役立っていると思う	288	45%
3. 特にプラスもマイナスもしなかったと思う	187	29%
4. むしろマイナスになったと思う	6	
5. 役に立ったか否かよくわからない	31	5%
無 回 答	6	
合 計	639	

(注) ⅧD表(その1)と対照されたい。

本項については、勿論各自が受けてきた音楽教育のよしあしに関わること大であり、又、音楽の専門教育の基礎づくりが、一般学校教育の枠外にあるかどうか一考を要するが、それも、一面においては有効なる関連性が保たれてよいはずである。役立ったと確信する者が19%であるのは、ともかく少数であるし、逆に「プラス・マイナスなし」(有意義と感じていない)が3割と、かなり多いことから、以上のことと関連して、現状の所謂専門教育(主として技術的音楽教育)なるものに閉鎖性乃至偏向性なきや、又一般的音楽教育の非力性についても一考を要するものと思われる。それは、後出のⅧD表(その1)の多数の批判的見解にもよく示されている…(小・中学校の音楽教育を「現状でよいと思わぬ」が約6割)。なお、第2の回答45%は、一応「無難な回答」として首肯出来る割合であろう。

F 音楽大学入試科目の準備中、専攻実技以外で最も苦労したと思う科目(年数をかけたということではなく)

△ 同 上▽

1. 一 般 学 科	73	11%
2. 楽 典	54	8%
3. 聴 音 書 取	314	49%
4. コールユーブンゲン	52	8%
5. 新 曲 視 唱	44	7%
6. そ の 他(※1)	26	4%
特 になし(※2)	27	4%
無 回 答	49	
合 計	639	

※1 その内では副科ピアノが多い

※2 回答者が追加記入している

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

一応各専攻別に集計したが、各専攻とも大体同傾向を示した。一般学科がかなり少いのは、或いは一般大学に比して問題がやさしいこと、又入試科目中の比重が小さいということなども関係があるやにもうかがえる。諸科目中で、特に「聴音書取」が他に比して圧倒的多数であることは注目に値する。今ここで、此の点に関して是非を論ずる意図はないが、かかる現象に対する見解に、少くとも大別して二種の（相対立する）立場が考えられるであろう。一つは、音楽大学志望者の弱点と解すること（乃至現状課題レベルに当然追随すべきだとの考え方）、もう一つは、当該科目において在り方に或種の無理がありはしないか、との見解（乃至は、受験生の斯かる労苦は、受験勉強の課程において、又入学後の学習において、如何に有意義であるかにつき反省の余地がないかどうか）。

I. G 音楽大学を志望した理由

△ I・III・IV年の合計—男女別▽

理由	専攻別		作		声		ピ		弦管打		合 計				
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計		
1. 専門の作曲家、演奏家になりたい	1/0	1	6/24	30	1/7	8	13/7	20	21	35%	38	7%	59	9%	
2. 学校の音楽教員になりたい	0/2	2	6/24	30	0/19	19	3/4	7	9	15%	49	8%	58	9%	
3. 1にまでなれなくとも専門の技術音楽的社会的活動をしたい	2/10	12	7/91	98 68%	5/80	85	7/27	34	21	35%	208	36%	229	36%	
															158人
4. 専門の音楽家や教員になる気が、音楽の専門的素養を身につけたい	0/9	9	1/61	62 25%	0/108	108 39%	1/17	18	2		195	34%	197	31%	
5. 特に1～4には当らないが、早くから音楽をやっていたので自動的に	0/4	4	0/11	11	83人	34%	3/43	46 17%	0/6	6	3	64	11%	67	10%
6. その他()	1/0	1	1/9	10	0/9	9	2/2	4	4		20		24	4%	
無 回 答			0/3	3	0/1	1	0/1	1	0		5		5		
合 計 (学生実数)	4/25	29	21/223	244	9/267	276	26/64	90	60		579		639		

志望理由の1～3項を広義の「専門的活動」、4～6項を「それ以外」として大別してみると、次の諸点が判断出来る。

- (1) 専攻によりその割合が相異なる。特にピアノ専攻が4対6で、非専門に傾く。
- (2) 男女差が大きい（男子の大部分が専門的活動を目指すのは当然と思われるが、女子では同等、特に1, 2項が15%と僅少である。）
- (3) 本項は次のIII表と内容的に重複するが、入学後、一層切実化した方針、特に高年次に於て、本項の入学志望理由からの推移状況を検討することは有意義であろう。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅰ 専門的学習に関する現在の体制

A 専攻実技の練習時間〔休暇中・試験中以外の1日平均〕

専攻 年次	作		声		ピ		弦管打		計		Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ年の計				
	Ⅰ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ・Ⅳ	作	声	ピ	弦管打	計
1時間程度	3	7	64 59% < 64%	87	2	4	1	1	2	12	10	151 62%	6	2	169 26%
2 "	1	8	39 36% > 26%	35	36	44	18	23	70	99	9	74 30%	80 29%	41 46%	204 32%
3 "	0	5	5	10	63	75	18	13	94	110	5	15 6%	138 50%	31 34%	189 30%
4 "	1	1			21	19	8	6	86	103	2		40 14%	14 16%	56 9%
5 "					1	4	1		30	26			5	1	6
6 "						1				1			1		1
無回答	1	2		4	1	5		1	2	2	3	4	6	1	14
合計	6	23	108	136	124	152	46	44	284	355	29	244	276	90	639

Ⅰ年次からⅢ・Ⅳ年次に進むに従って、各専攻共やや減少の傾向が見られるのは、望ましい傾向とは言い難い。全体としては、声楽に比して器楽が、特にピアノ専攻が長時間をかけている。

B 専攻以外（副科）の実技の練習時間〔同上〕

ピアノ 1 半時間, 2 1時間, 3 1時間半, 4 2時間, 5 2時間半, 6 3時間以上

ピアノ以外（実技科目） 1 半時間, 2 1時間, 3 1時間半, 4 2時間, 5 2時間半, 6 3時間以上

C 実技以外の専門理論教科の自由学習時間——作曲・音楽学専攻者は記入しないでAに記入〔同上〕

音楽理論 1 しない, 2 半時間程度, 3 1時間, 4 1時間半, 5 2時間以上
音楽史 上記の相当番号で記入(), ……その他(科目) 上記の番号で記入()

以上のⅠ・B, Cは省略

D 音楽学生としての学習方針

年次別	Ⅰ年		Ⅲ・Ⅳ年	
	人数	割合	人数	割合
1. 専攻実技の修業本位にやっている	85	30%	133	37%
2. 専攻実技だけでなく種々の専門科目を総合的に重視	72	25%	77	22%
3. 専門教育科目だけでなく一般教育科目にも精々強くなるよう心がけている	92	32%	85	24%
4. 好きな、得意な科目に重点をおく	6	2%	9	3%
5. 不得意な科目に力を入れている	5	2%	1	0%
6. その他()	1	0%	4	1%
7. 特定の意向なし	16	6%	37	10%
無回答	7	2%	9	3%
合計	284		355	

第1の態度が、上級学年で増加しているのは当然と言えようが、それが3分の1内外で、第2, 第3項が

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

半数内外を占めることは、ⅠG表（志望理由）及びⅢ表（卒業後の方針）のデータに相関的である。全人的成長という見地からすれば望ましいことと考えられよう。

Ⅱ. E 専門教育科目で興味のある科目ときらいな科目——専攻以外で特に興味あるものがあれば○、きらいなものがあれば△を〔どちらも2つまで可〕

- 1 副科実技……イ 声楽, □ ピアノ, ハ ピアノ以外の器楽 ()
- 2 音楽理論……イ 音楽通論, □ 和声, ハ 対位法, その他 ()
- 3 音楽史
- 4 ……イ 音楽美学, □ 音楽心理学, ハ 音響学, ニ 音声学
- 5 演奏理論
- 6 ソルフェージュ……イ 視唱, □ 聴音・書取, ハ 視奏・キーボードハーモニ,
ニ スコアリーディング
- 7 ……イ 合唱, □ 合奏 (重奏やオーケストラを含む)
- 8 音楽科教育法 (教職の)
- 9 その他 ()
- 10 特になし

回答数がまちまちであり、集計を保留した。

F 専門教育科目以外で興味をもつもの〔2項まで可〕

科 目	専 攻				計			
	作	声	ピ	弦 管 打				
1. 一般教育科目 (内訳不明)		1		3	3	7		
イ, 人文 関係	10	57 内 59%	97 71%	55 内 65%	85 56%	14	136 内 60%	226 64%
ロ, 社会 関係	2	26		14	8	30	50	
ハ, 自然 関係	2	13		13	5	33		
2. 外国語科目	4	39	29%	44	29%	31	118	33%
3. 教職課程科目	4	10	7%	13	9%	1	28	8%
4. 特になし	9	35	26%	33	22%	22	99	28%
無 回 答		2		3		4	9	
合 計 (学生実数)	23	136		152		44	355	

諸科目群の中では、一般教育科目に、とりわけ人文関係に興味が集中している。又教職課程科目は著しく僅少であるのが目立つ。(にも拘らず、可成り多数のものが免許状取得を希望している……Ⅲ項の7、20～27%)

Ⅲ 卒業後の方針

- 1 音楽を専門として(職業人として)やりたい……イ 音楽家(作曲家や演奏家——プロ合唱団・合奏団員を含む)を目指して更に修業したい
 ロ 学校の音楽教員になりたい……(1)専任として, (2)非常勤として, ハ 音楽教室(ヤマハやカワイなどの)の講師になりたい,
 ニ 上記以外で音楽に関係ある実務をやりたい(放送関係, 会社の音楽指導など),
 2 上記以外の一般職につきたい, 3 特に音楽を職業としないで, 個人指導など機会があればやってみようと思う,
 4 家庭人として家庭生活に音楽を生かしてゆきたい, 5 その他(), 6 未定,
 7 〔特にはっきりと次のように考えているなら○を記入〕……イ 学校の音楽教員にはなりたくない(従って教職科目も受けない),
 ロ 教員になる意志はないが教職科目だけは受けるつもり, ハ 何によらず音楽の指導に当る意志はない

(その1)

年次 専攻別 項目	I					Ⅲ・Ⅳ					I・Ⅲ・Ⅳ															
	作	声	ピ	弦管打	計	作	声	ピ	弦管打	計	作	声	ピ	弦管打	計											
1 イ	1	36	10	22	69	-24%	1	25	11	13	40	-11%	2	61	-25%	21	-8%	35	-39%	109	17%					
〃 ロ (1)	1	12	11	2	26		4	10	8	4	26		5	22		19		6		52						
〃 〃 (2)		7	71	7	46		3	14	90	8	51		3	21	161	15	97	53	39	315						
〃 〃 ? (※)		5	66%	2	37%	2	65%	9	-150	53%	5	66%	4	34%	1	52%	10	-165	46%	19	49%					
〃 ハ	1	6	12	1	20		2	19	11	3	35		3	25	23	35%	4	59%	55							
〃 ニ		5	4	46%	3	12	29%	1	17	9	38%	2	29	2	29	32%	1	22	13	42%	5	41	31%			
2		1	2	↑	3	↑		2	↑		2	↑		1	4	↑		5	↑							
3	1	12	11%	45	36%	5	63	22%	3	18	13%	47	31%	9	77	22%	4	30	12%	92	33%	14	140	22%		
4	1	9	10	1	21		3	14	20	13%		37	10%	4	23	30	1	58								
5									1		1	2		1			1	2								
6	1	7	12	4	24		6	7	11	6	30		7	14	23	10	54									
7 イ			3	4	7				2	1	3				5	5	10									
〃 ロ		13	12%	23	19%	6	42	15%	3	30	22%	31	20%	12	27%	76	21%	3	43	18%	54	20%	18	20%	118	18%
〃 ハ																										
無回答		4	7	2	13				5	9	3	17				9	16	5	30							
合計(学生実数)	6	108	124	46	284		23	136	152	44	355		29	244	276	90	639									

(※) 内訳の記入なし

既にIG項に於て若干検討したが、学生の卒業後の方針を本表に於て概観すると、特に女子の場合<専門の演奏家・作曲家>や、<学校の音楽教員>志望が少く、自身の教養を目指すものが多い。又、たとい専門としてやることを目指しても、その中では「音楽教室」講師志望が最も多い。（「個人指導」と合すると約半に及ぶ）又、上・下の両表から全般として伺えるのは、将来の音楽的社会活動への意欲（1のイ、ロを中心として見た場合）が、上級年次女子において減少の傾向を示すことである。（男子は増加する）このことは、後出X項のうちコンプレックスの主たるものが「学習上の問題」（66%）で、しかもその7割余が専攻実技の能力に関してであることと関連して、音楽学生の学習の在り方につき検討の要あることを示しているとも言えそうである。前記の如き「専門家よりはむしろ教養主義的に」という傾向は、現今一般に見られるところであり、それに関連してここに敢えて言うならば、そのような動向と、現在の音楽大学の教育体制との間に、何がしかの「ずれ」がありはしないか、ということである。もとより此の問題は、様々の事情を総合的に考慮しないで軽々には論じらるべくもないが、少くとも、音楽大学教育にとって重大な眼目であることは否めないと思う。

Ⅱ (その2)

項目	男						女						計					
	I		Ⅲ・Ⅳ		計		I		Ⅲ・Ⅳ		計		I		Ⅲ・Ⅳ		計	
1 イ	17	-53%>	12	-43%	29	-48%	52	-21%>	28	-9%	80	-14%	69	-24%>	40	-11%	109	-17%
ク ロ (1)	4		4		8		22		22		44		26		26		52	
ク ク (2)	1		2	24	3	49	13	125>	23	141	36	266	14	150>	25	165	39	315
ク ク? (※)	1	25<	3	(86%)	4	(82%)	8	50%>	7	43%	15	46%	9	53%>	10	46%	19	49%
ク ハ		(78%)					20	-8%	35	-11%	55	-9%	20	7%	35	-10%	55	-9%
ク ニ	2		3		5		10	33%	26	34%	36	33%	12	92%	29	32%	41	31%
2			1		1		3	↑	1	↑	4	↑	3	↑	2	↑	5	↑
3			1		1		63	25%	76	23%	139	24%	63	22%	77	22%	140	22%
4							21	8%	37	11%	58	10%	21	7%	37	10%	58	9%
5									2		2		0		2		2	
6	2		3		5		22		27		49		24		30		54	
7 イ	1		1		2		6		2		8		7		3		10	
ク ロ	3		3		6		39	15%	73	22%	112	19%	42	15%	76	21%	118	18%
ク ハ																		
無回答	0		0		0		13		17		30		13		17		30	
合計(学生実数)	32		28		60		252		327		579		284		355		639	

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅳ ヨーロッパ音楽で特に興味のある（好きな）もの〔A,B,C各2項まで選択可〕

A 時代別

Ⅲ・Ⅳ年次—専攻別

	作	声	ピ	弦管打	計
1. 中世～ルネッサンス	1	2	2	0	5
2. ルネッサンス	0	2	1	0	3 1%
3. ルネッサンス～バロック	1	3	7	2	13 4%
4. バロック (バッハ,ヘンデル頃まで)	6	34 25%	47 31%	17 39%	104 29%○
5. 古典主義 (ロココ,前古典主義を含む)	5	30 22%	56 37%	11 25%	102 29%○
6. ロマン主義	8	71 52%	98 64%	23 52%	200 56%
7. 近代 (19世紀末～20世紀始頃)	4	12	18 12%	5	39 11%
8. 近代～現代	2	3	6	3	14 4%
9. 現代	0	1	2	1	4 1%
10. 全体に亘り甲乙がつけられない	5	23 17%	11	6	45 13%
無回答	1	6	2	1	10 3%
合計 (学生実数)	23	136	152	44	355

全専攻を通じて、又特にピアノ専攻において、ロマン主義音楽が最も好まれ、近代～現代音楽への興味は僅少である。

B ジャンル別

Ⅲ
上

	作	声	ピ	弦管打	計
1. 大編成の合奏曲 (管弦楽,協奏曲など)	12	30 22%	76 50%	30 68%	148 42%
2. 吹奏楽	0	2	1	3	6
3. 室内楽	2	8	22 14%	13 30%	45 13%
4. 独奏曲	5	2	77 51%	11 25%	95 27%
5. 歌曲	1	54 40%	7 5%	1 2%	63 18%
6. 劇 (舞台) 音楽 (オペラ,バレエなど)	3	59 43%	14 9%	4 9%	80 23%
7. 合唱曲	1	6	5	1	13
8. 宗教音楽	1	26 19%	19	5	51 14%
9. いわゆるポピュラー音楽	0	11	11	2	24 7%
10. 全体に亘り甲乙がつけられない	5	17 13%	14	5	41 12%
無回答	2	4	5	1	12
合計 (学生実数)	23	136	152	44	355

専攻毎にはっきりと傾向を分つが、特に声楽専攻者の1.に対する興味、又器楽専攻者の歌曲に対する好みの夫々僅少であるのが目立つ。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅳ. C 地域別

△Ⅲ・Ⅳ年次
—専攻別—
▽

	作	声	ピ	弦管打	計
1. ドイツ・オーストリア音楽	12	66 49%	95 63%	26 59%	199 56%
2. フランス音楽	5	12	27 18%	4	48 14%
3. イタリアー音楽	1	70 51%	27 18%	7 16%	105 30%
4. ロシア・ソビエト音楽	2	8	8	4	22 6%
5. アメリカ音楽	0	2	5	1	8
6. チェコ・ハンガリー系音楽	1	2	7	2	12
7. スペイン系音楽	2	1	3	1	7
8. 北欧系音楽	1	4	5	1	11
9. その他()	0	0	1	0	1
10. 特に指定出来ない	7	24 18%	34 22%	13 30%	78 22%
無回答	0	7	6	1	14
合計 (学生実数)	23	136	152	44	355

以上につき、好みの全体的傾向としては、自身の学習（主として実技の勉強）している範囲に大きく左右されているように思われる。それは例えば次項Dにおいて、チャイコフスキー（一般好楽家の愛好を集めている）が、かなり低位にあることなども符合するのではなかろうか。

Ⅳ. D 現在特に敬愛(傾倒)している作曲家〔すぐに思いつくもので5人以内にしばって記入〕

(その1) 欧米人作曲家

年次 専攻	Ⅰ					Ⅲ・Ⅳ					Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ 合計								
	作	声	ピ	弦管打	計	作	声	ピ	弦管打	計	作	声	ピ	弦管打	合計				
1. ベートーヴェン	2	65	73	32	172 61%	13	68	92	26	199 56%	15	133	55%	165	60%	58	64%	371	58%
2. J. S. バッハ	3	34	46	26	109 38%	13	50	80	23	166 47%	16	84	34%	126	46%	49	54%	275	43%
3. モーツァルト	2	45	36	15	98 35%	9	68	62	24	163 46%	11	113	46%	98	36%	39	43%	261	41%
4. ショパン	1	34	58	12	105 37%	8	43	81	6	138 39%	9	77	32%	139	50%	18	20%	243	38%
5. シューベルト		46	22	7	75 26%	4	66	23	5	92 26%	4	106	43%	45	16%	12	13%	167	26%
6. シューマン		11	25	0	36 13%	1	26	41	1	69 19%	1	37	15%	66	24%	1		105	16%
7. ブラームス		6	15	9	30 11%	2	20	32	13	67 19%	2	26	11%	47	17%	22	24%	97	15%
8. リスト	1	12	24	1	38 13%	1	14	40	2	57 16%	2	26	11%	64	23%	3		95	15%
9. チャイコフスキー	2	15	16	11	44 15%	5	13	15	15	48 14%	7	28	11%	31	11%	26	29%	92	14%
10. ドビュッシー	1	0	17	4	22	7	8	25	1	41 12%	8	8		42	15%	5		63	10%
11. ヘンデル		6	2	7	15		12	12	9	33 9%		18		14		16	18%	48	
12. メンデルスゾーン		5	5	5	15		12	5	8	25		17		10		13	14%	40	
13. ヴェルディ		9	1	1	11		20	1		21		29	12%	2		1		32	
14. プッチーニ		7			7		23	1		24		30	12%	1				31	※
学生実数					284					355					639				

※ 次位はハイドン (17人), ラヴェル (16), ラフマニノフ, J. シュトラウス (15), ワグナー (14), ウェーバー, ショスタコヴィッチ (13), ドボルザーク (12), ベルリオーズ (11), その他は9人以下。

(注) 1. 順序はⅠ・Ⅲ・Ⅳ年次の総合計で記入の多いものから順に並べた。

2. 記入されたすべての作曲家のうち、ⅠとⅢ・Ⅳの合計らん及びⅠ・Ⅲ・Ⅳ合計らんの各専攻（作曲以外）何れかで10%以上のもののみあげた。
3. 無回答 Ⅰ36, Ⅲ・Ⅳ34, 計70
4. 記入総数 Ⅰ937, Ⅲ・Ⅳ1341, 計2278
5. あげられた作曲家の総数は、Ⅰ年次60人, Ⅲ・Ⅳ年次によって70人。

上位の順位を年次別・専攻別（声楽・ピアノ）にみると、Ⅰ（声）ベートーヴェン、シューベルト、モーツァルト、Ⅰ（ピ）ベートーヴェン、ショパン、バッハ、Ⅲ・Ⅳ（声）ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルト（ほぼ同等）、Ⅲ・Ⅳ（ピ）ベートーヴェン、ショパン、バッハ。又、本表においても、上位は（J.S.バッハを除き）「古典～ロマン派中期」に集中している。なお、本項では記入を5名に限定したが、10名程度まで挙げれば、より広い分布と集中度の確かさが得られたのではないかと思われる。

Ⅳ. D (その2) 日本人作曲家

年次	Ⅰ 計		Ⅲ・Ⅳ 計		Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ					
	作	声	ピ	弦管打	合 計					
1. 山田 耕 柝	122	43%	176	50%	15	126	122	35	298	47%
2. 中 田 喜 直	48	17%	120	34%	5	87	66	10	168	26%
3. 滝 廉 太 郎	54	19%	49	14%	0	52	43	8	103	16%
4. 団 伊 玖 磨	22	8%	43	12%	1	37	22	5	65	10%
5. 信 時 潔	14	5%	45	13%	1	33	23	2	59	9%
6. 平 井 康 三 郎	10	4%	29	8%	2	22	14	1	39	6%
7. 清 水 脩	15	5%	23	6%	3	21	10	4	38	6%
学 生 実 数	284		355						639	

- (注) 1. Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ合計の8位は中山晋平(14人), 以下略。
 2. あげられた作曲家総数 Ⅰ年次38人, Ⅲ・Ⅳ年次 60人
 中田喜直がⅢ・Ⅳ年次に激増するのは、合唱などを通じて親しむ結果かと思われる。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

V 現代音楽や非ヨーロッパ音楽への関心

A 現代音楽について（第一次世界大戦後頃から今日にかけての音楽——但し前衛主義的音楽を除いて）

Ⅲ・Ⅳ年次 — 男女別	男 子		女 子		計	
	1. 大いに興味をもっている	8 29%	>	33 10%	41 12%	
	2. 或程度関心はあるが、特に興味はもたない	12 43%	}	163 50%	175 49%	
	3. あまり好きではない	5 18%		80 24%	85 24%	
	4. あまり関心がない	2 7%		43 13%	45 13%	
無 回 答	1		8	9		
計	28		327	355		

興味の深淺は、男女に於てかなり差が見られる。

B 現代音楽の中でも特に前衛主義的な音楽について（電子音楽、ミュージック・コンクレート、偶然性の音楽など）

Ⅲ・Ⅳ年次 — 専攻別・男女別	作	声	ピ	弦管打	男 子	女 子	計									
	1. 好き嫌いに拘らず大いに関心がある	17%	13%	9%	16%	25%	> 11%	42人	12%							
	2. 同感（同情）がもてる		4	5		3	3	12	3%							
	3. 概して好まない（内訳不明）		2	5	7		4	12	3%							
	クイ、ぼかばかしいと思う		1	1	2		1	3	1%							
クロ、感覚的に反撥を感じる	39	83%	33	52%	30	55%	18	41%	25	54%	31	54%	108	192	30%	54%
クハ、音楽の破壊だと思ふ	4		3		6		2		11		4		15		4%	
クニ、その他の理由で（はつきりえないが）	39		14		14		11		18		15		54		15%	
4. 無関心（内訳不明）		2	3	9		3	10	3%								
クイ、よく知らない		17	26%	16	26%	16	39%	11	18	< 16	27	55	92	15%	26%	
クロ、接する気がない		8		6		14		7		8		27		8%		
無 回 答		5%	5%	4%		5%	17人	5%								
合 計	23人	136人	152人	44人	28人	327人	355人									

（注）計，合計らん以外はすべて%

1及び4に男女差が見られる。なお、「此の方面で知っている作曲家の名（邦・外人を問わず）」を5人以内で記入を求めたところ、＜作曲家の名を記入した学生数＞38人——内大多数が1～2の名を記入した。（ジョン・ケージ17，松下真一10，諸井誠4，武満徹4，シュトックハウゼン3，他に8作曲家を各1記入）

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

V. C 日本の現代作曲家の作品について

Ⅲ・Ⅳ年次 —専攻別—		作	声	ピ	弦管打	計	
	1. 大いに関心をもつ <small>(積極的に知ろうと努めている)</small>	13%	7%	2%	14%	23人	6%
2. 自然に接する程度に関心がある	43	56	46	41	173	49%	
3. あまり関心がない	26	21	29	23	88	25%	
4. よく知らない	17	15	22	20	68	19%	
無 回 答		1	1	2	3	1%	
合 計	23人	136人	152人	44人	355人		

関心をもつものが少い。特にピアノ・声楽専攻において著しい。

D 日本の伝統的音楽について

E いわゆるヨーロッパ芸術音楽以外の種々な民族(俗)音楽について

Ⅲ・Ⅳ年次 —男女共—	D			E		
	I	Ⅲ・Ⅳ	計	I	Ⅲ・Ⅳ	計
1. 興味をもつ	75人 26%	94人 26%	169人 26%	113人 40%	127人 36%	240人 37%
2. もっと知りたいと思う	104 37%	125 35%	229 36%	90 32%	113 32%	203 32%
3. あまり関心がない	77 27%	101 28%	178 28%	50 18%	70 20%	120 19%
4. よく知らない	21 7%	31 9%	52 8%	22 8%	33 9%	55 9%
無 回 答	7	4	11	9 3%	12 3%	21 3%
合 計	284	355	639	284	355	639

I～Ⅲ・Ⅳ殆ど同様であり、又、C項に比して興味をもつものがかなり多い。E項(右)では更に多い。ここでは、最近の音楽界の動向を、音楽学生も亦示しているものと思われる。

F 上記のいろいろな事柄について(一般的に)

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ年次 —男女共—		
1. 大いに興味をもっている		8%
2. 或程度に関心はもっている		30%
3. もっと関心をもつべきだと考えている	○	47%
4. そこまで関心を払う余裕がない		4%
5. 今のところ特に関心がない		7%
無 回 答		4%
合 計		639人

男女別にみても大体同傾向を示している。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅵ いろいろな音楽上の経験について

A これまでに合奏・合唱など(専門団体)の公開演奏会をきいた経験〔生まで〕

年次		I	Ⅲ・Ⅳ
なし		4人 1%	0
1～2回		8%	5人 1%
数回		30%	14%
10回前後		20%	16%
10数回		14%	21%
20回以上		27%	46%
無回答		1人	5人
計		284人	355人

△年次別・男女共▽

I→Ⅲ・Ⅳ年次に従い経験が増加するのは当然のことであろうが、I年次に於て、数回以内のものが約4割を占めることは、音楽学生の入学前の状況に対して暗示的である。

C ここ1年位の間に、公開演奏会に行った1ヶ月平均の回数(門下生発表会等を除く)

年次		I	Ⅲ・Ⅳ	計
1回未満		○ 44%	17%	29%
1回位		29	○ 35	○ 32
2回位		16	27	22
3回位		4	11	8
4回位		1	3	2
5回以上		4	5	5
無回答		2	3	2
計		284人	355人	639人

△年次別・男女共▽

この項は、地域的な事情、例えば開催される演奏会の頻度などにも規制されることはいうまでもない。

E 現在音楽放送(ラジオ・テレビ)で自分の利用率の高いもの……………省略

F 音楽放送(ラジオ・テレビ)やレコードをきく時間〔休暇中・試験中を除き1週間当たり平均〕

2時間以下	○ 37%
3～4時間	29
5～6時間	13
7～8時間	10
9～10時間	4
10時間以上	5
計	639人

△IⅢⅣ年次全員▽

(無回答5人)

概括的には、「1日平均半時間以内」が6割弱ということである。

B これまでに舞台音楽(オペラ・バレエなど)を鑑賞した経験〔放送を除き、生まで〕

年次		I	Ⅲ・Ⅳ
なし		16%	3%
1～2回		31%	15%
数回		38%	44%
7～8回以上		14%	38%
無回答		(3人)	(4人)
計		284人	355人

△同左▽

大体Aの場合と同様の傾向が見られるが、未経験がI=16%、Ⅲ・Ⅳ年次ですら3%あることには注意したい。

D 音楽鑑賞団体への関係

入っている	17%
イ、労音会員	(37人 6%)
ロ、学音会員	(7人)
ハ、音協会員	(8人)
ニ、定期演奏会会員	(8人)
ホ、大阪国際フェスティバルシーズンメンバー乃至常連	(43人 7%)
ヘ、その他	(6人)
入っていない	83%
計(学生実数)	639人

△IⅢⅣ年次全員▽

G 演奏会、音楽放送、レコードなどのきき方

なるべくいろいろな種目に亘ってきくよう心がけている	24%
自分の専攻種目がとかく多くなり勝ち	○ 48
自分の専攻関係以外にはあまり気が向かない	1
特に意図せず随意に	26
計	355人

△Ⅲ・Ⅳ年次▽

(無回答5人)

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅶ 現在の日本の音楽事情に関する関心や見解

- A 創作活動（動向）について { 1 大いに関心を払っている } …… イ 大変盛況で結構と思う，
 { 2 或程度関心を払っている } ……
 □ 全般にもっと活潑にならねばと思う， ハ もっと水準の高い作品が多く現われてほしい，
 ニ もっと日本的な伝統に立つ方向に伸びてほしい， ホ ヨーロッパの様式傾向は当然乃至やむを得ない，
 ヘ 十二音や前衛的傾向が強すぎるように思う， ト 創作活動がもっといろいろな点で理解，擁護されねばならぬと思う，
 3 あまり関心をもちない……イ もつ気がない， □ もつ余裕がない， ハ よく知らない
- B 演奏活動について { 1 大いに関心を払っている } ……状況を知るのは主に…… イ 新聞や雑誌のニュースで，
 □ 精々自分の耳をたよりに（直接ふれて）， ハ 同僚間の話して， ニ いろいろな案内書やポスター・ピラなどで， ホ その他（ ）， 3 一般の事情にはあまり関心をもちない……イ もつ気がない， □ もつ余裕がない， ハ よく知らない
- A 創作活動について

	男子	女子	計
1	11人 39%	18人 6%	29人 8%
2	14 50%	194 59%	208 59%
1・2イ	1	7	8
□	9 (内 36%)	61 (内 29%)	70 (内 30%)
ハ	4	24 (11%)	28 (12%)
ニ	3	32 (15%)	35 (15%)
ホ		6	6
ヘ		12	12
ト	4	56 (27%)	60 (25%)
1 ?	3	0	3
2 ?	1	13	14
3 イ	1	12	13
□	1	21	22
ハ	1	64	65
?		8	8
無回答	0	10	10
合計	28人	327人	355人

△Ⅲ・Ⅳ年次——男女別▽

11% < 32%

積極的な関心は男子が多く女子は僅少。

なお之は、ⅤC項（日本の現代作曲家の作品について）と関連し、その1はⅤC項の数値にほぼ相応している。

- B 概略のみ示せば、演奏活動について { 1. 大いに関心を払っている = 47%
 { 2. 或程度関心を払っている = 51%
 前のA項に比して、1.の比率が格段に多いことが明瞭にわかる。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅶ. C 評論活動について（音楽雑誌・新聞・放送などの音楽批評等）

△Ⅲ・Ⅳ年次 男女別			男子	女子	計
	1. いつも注意を払っている		9人32%	88人27%	97人 27%
2. 時々接する程度		16 57%	207 63%	223 63%	
(1. 2. の内訳)		(2)	(51内17%)	(53)	
イ, 大いに啓発される		(11内44%)	(76×26%)	(87)	
ロ, 一般的にもっと内容が向上してほしいと思う		(9×36%)	(58×20%)	(67)	
ハ, あまり心よく思わない		(2)	(21)	(23)	
ニ, その他()					
3. 特に興味をもたない		3	27 8%	30	
4. よく知らない		0	3	3	
無 回 答		0	2	2	
合 計		28人	327人	355人	

いわゆる「音楽批評」に対して男子は約8割, 女子は約半数が批判的であることを示している。

D 教育活動の状態について

(その1) 小・中学校の音楽教育について

1. 大体現状でよいと思う	12人	78人22%
イ, 現状の方向で結構	58	
ロ, 現状をもっと推進してゆけばよい	8	
内 訳 不 明	8	
2. 現状でよいとは思わない	39	200人 56%
イ, 改善の余地大と考える	9	
特に(1)設 備	63内32%	
(2)時 間 数	32	
(3)音楽教員の質	2	
(4)一般の認識	16	
(5)その他()	31内16%	
内 訳 不 明	8	
ロ, 根本的改善のがある要と思う	48 16%	
内 訳 不 明	29	
3. よくわからない		
無 回 答		
合 計	355人	

(その2) 早期教育活動について

この頃の隆盛は大変結構	20人 6%	
1. で, どんどん推進すればよいと思う	49内27%	179人 50%
2. 若干疑問がある	105内59%	
イ, 或程度やり方に偏りがあり修正を要すると思う	5	
ロ, やり方によっては弊害もあると思う	7	
ハ, 専門コースとしても全面的に必須とは思わない	1	
ニ, 何となくそう思う	12	
ホ, その他()		
内 訳 不 明	2	
3. あまり賛成でない	8	
4. よくわからない	146※ 41%	
無 回 答		
合 計	355人	

※無回答が多かったのは, アンケートの示し方の点で読み落しがあった故と思われる。

(その1) 小・中学校の音楽教育に対する考え方については, 現状肯定論は少なく(22%), 過半数(56%)が現状に対して批判的である。その内でも最も多いのが「教員の質」の問題に対して向けられている(16%)。此のデータは, 既掲のIE項(自己経験の反省)における「プラスもマイナスもなし」=29%, 「マイナス」=1%, 「役立ったかどうかわからない」=5%, 計35%を更に上廻る率である。それは,

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

従来的一般学校音楽教育の実情を暗示しているが、彼等自身、次代のそれを担うものとしての責任的自覚の点では如何であろうか。

(その2) 早期教育活動についても、先に(ⅠC項)見た如く、未経験者(85%)の約7割が、「やればよかった」と思いながら、本項に於ては大多数が若干の疑問視を示している。それは、本表では50%だが、かりに無回答(本項のみ特別多かった)の41%を各項に按分加算してみるならば、それは85%に及ぶこととなる。此の点については、未経験の故に疑問視するという解釈も一応あり得るが、Ⅲ・Ⅳ年次の音楽学生の経験や判断力から考えて、あなたがち根拠なしと否定するわけにはいかないであろう。それは、本項1の6%(上記の修正をほどこせば10%)が、ⅠC項の有経験者15%を下まわること、つまり有経験者中にも疑問視するものが存在するという点からも言えることである。

「疑問視」のうちでも特に「やり方によっては弊害もあると思う」及び「或程度偏りがあり修正を要すると思う」が大部分を占める。現今の此種の教育活動についても、大いに改善・反省を要する所以ではなかろうか。

Ⅶ. E 大衆音楽の動向について

1. 多少とも関心がある(肯定、否定は別として)……60%
2. あまり関心がない……………33%

(Ⅲ・Ⅳ年次355人、内無回答24人)

Ⅷ 芸術一般についての関心や見解

A (興味をもつ芸術分野)

- 1 いろいろな芸術に広く興味がある。
- 2 音楽以外で特に次のものに興味がある〔2~3項まで可〕イ文学……(1) 日本文学, (2) 外国文学,
 - 美術(絵画や彫刻)……(1) 東洋や日本, (2) 西洋, (3) 原始, 古代, (4) 特に抽象・超現実・立体主義の各派や前衛美術など, (5) その他()
 - ハ 建築, ニ 工芸, ホ 演劇,
 - ヘ 舞踊……(1) 邦舞, (2) 洋舞, ト 映画, チ 華道・茶道など(日本の伝統的芸道), リ 服飾・装飾
 - ヌ その他()
- 3 音楽以外の芸術には、あまり(積極的な)関心がない。
- 4 いろいろな芸術に興味をもちたいと思うが、現状ではその余裕がない。

小項目にしたがって、興味もたれる順位の上位のものをあげれば次の如くである。1位=文学(内では外国文学が約%), 2位=美術(内では西洋美術が約%), かなり開いて3位=華道・茶道など, 4位=服飾・装飾, 5位=映画……以下略。(集計の結果は、全体としては統計的目標からやや外れた、漠然としたものになった。)

B 人類(人間生活)にとつての芸術の必要性

△Ⅲ・Ⅳ年次 男女共▽	1. 絶対必要と思う……? (内訳不明)	20人内18%	} 111人 32%
	〃 イ, それについてよく考える	35 32%	
	〃 ロ, 〃 考えてみる必要があると思う	51 46%○	
	〃 ハ, 〃 理由はよくわからない	5 5%	
	2. 必要というより, 必然的に存在するものと思う	216	○ 61%
3. ある方が望ましいが, 絶対に必要とも思わない	12	3%	
4. 必要か不必要かは考え次第だと思う(不必要との考え方も理解出来る)	7	2%	
無 回 答	9	3%	
合 計		355人	

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅷ. C 芸術が個人において果たす主要な役割を次のように考える

△Ⅲ・Ⅳ年次 —男女共— ▽	1. 娯楽として	6人	2%
	2. 人生の苦悩をやわらげるために	10	3%
	3. 円満豊富な人間形成のために	94	26%
	4. 人生に豊かな潤いをもたらすために	144	○ 41%
	5. 人間の、より深い自覚への働きとして	69	19%
	6. 人間の限りない個性の発現のために	47	13%
	7. よくわからない	1	0%
	8. その他 ()	1	0%
	無 回 答	13人 *	4%
合 計	355人		

項目の設定が芸術の人間（個人）における意義（存在理由）を考えると、効用論的立場からの見解とが混同する結果をまねいたが、彼等の芸術観の何がしかを示していると解せられよう。

D 上のようなことについて

△同 上 ▽	1. よく(時々)考えてみることがある	69%
	2. あまり考えてみたことはない	24%
	無 回 答	7%
	合 計	355人

上のようなことについて考えてみることは自分にとって

1. 必要だと思う	66%
2. あまり意味がないと思う	2%
3. あまり関心がない	2%
4. よくわからない	4%
無 回 答	26%
合 計	355人

Ⅸ 読書傾向について

A ここ半年程の間に書物（教科書以外の単行本）を読んだ冊数〔1ヶ月平均〕

	I 回生(男女共)		Ⅲ・Ⅳ回生(男女共)		I・Ⅲ・Ⅳ回生		計	
	人	%	人	%	男 子	女 子	人	%
半冊以下	49人	17%	65人	18%	9人	105人	114人	18%
1 冊 位	93	33%	103	29%	12	184	196	31%
2 〃	66	23%	86	24%	20	132	152	24%
3 〃	26	} 23%	37	} 26%	8	55	63	10%
4 〃	11		19		0	30	30	5%
5 冊以上	29		37		8	58	66	10%
無 回 答	10		8		3	15	18	2%
合 計	284人		355人		60人	579人	639人	

男子のみの集計を除いて、何れもほぼ半数が1冊以内、男子では35%がそれに当る。4冊（おおよそ週1冊の割合）以上のものは、何れも15%程度である。上級年次へ、僅かに増加が認められる。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅱ. B 高校以後に読んだ本で最も感銘を得たもの〔種数を問わず、3冊以内を記入〕
作家別

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ年次 男女共	順位	著者	読書人数	順位	著者	読書人数	順位	著者	読書人数
	1	ロマン・ロラン	56人13%	9	ジイド	25人6%	17	倉田百三	16人
	2	トルストイ	48 11%	10	シャーロット・ブロンテ	22 5%	18	サマセット・モーム	14
	3	パールバック	43 10%	11	石川達三	20	19	島崎藤村	11
	4	ドストエフスキー	40 9%	11	ゲーテ	20	19	太宰治	11
	5	ミッチェル	38 *	11	ヘミングウェイ	20	19	シュバイツァー	11
	6	ヘッセ	31 7%	14	エミリー・ブロンテ	19	20	デュガール	10
	7	モーパッサン	26 6%	15	武者小路実篤	17	(以下略※)		
7	夏目漱石	26 *	15	スタンダール	17				

※以下11作家=9~5人が読む, 24作家=4~3人, 17作家=2人, (639人中199人=無回答, %は) (無回答を除く440人に対して。) その他=各1人。

Ⅰ 上 Ⅳ	書目別		順位			
	1	パール・バック:大地	42 10%	11	ジイド:狭き門	17
	2	ミッチェル:風と共に去りぬ	38 9%	12	スタンダール:赤と黒	16
	3	ドストエフスキー:罪と罰	29 7%	13	ヘッセ:知と愛	13
	4	ロマン・ロラン:ジャン・クリストフ	28 6%	13	トルストイ:復活	13
	5	モーパッサン:女の一生	25 6%	15	倉田百三:出家とその弟子	12
	6	シャーロット・ブロンテ:ジェーン・エア	22 5%	16	トルストイ:戦争と平和	11
	7	トルストイ:アンナ・カレーニナ	20	16	ゲーテ:若きヴェルテルの悩み	11
	8	ロマン・ロラン:魅せられたる魂	19	16	島崎藤村:破戒	11
	8	エミリー・ブロンテ:嵐ヶ丘	19	19	デュガール:チボー家の人々	10
10	夏目漱石:心	18	20	武者小路実篤:友情	9	

※以下13書目=8~5人が読む, 10書目=4人, 15書目=3人, (以下略※) 47書目=2人, その他=各1人。

C 次の音楽雑誌で定期購読, 又は図書館などで欠かさず閲読しているもの……○, 時々よむもの……△〔あるだけ記入〕

種類	年次		Ⅰ		Ⅲ・Ⅳ		計	
	○	△	○	△	○	△	○	△
1. 音楽芸術	9人 3%	34人 12%	31人 9%	56人 16%	40人 6%	90人 14%		
2. 音楽の友	77 27%	129 45%	90 25%	118 33%	167 26%	247 39%		
3. 教育音楽(小・中)	3	8	2	23 6%	5	31 5%		
4. レコード芸術	7 3%	35 12%	9 3%	50 14%	16 3%	85 13%		
5. ミューズ	0	2	1	8	1	10		
6. 音楽生活	3	16 6%	4	24 7%	7	40 6%		
7. 芸術新潮	5	13 5%	11 3%	35 10%	16 3%	48 8%		
8. 外国雑誌	3	8	0	13	3	21 3%		
9. その他()	5	3	5	5	10	8		
無回答	38 13%	0	24 7%	0	62 10%	0		
合計(学生実数)	284人		355人		639人			

○, △ともに, 音楽の友が格別多いのが目立つ。併し上級年次でそれは若干減少し, 他種のものに散布する。定期購読・閲読の合計はⅠ年次で40%, Ⅲ・Ⅳ年次で43% (但し, 実数は, 同一人が二種以上をあげているだけ, 更に若干減少する)

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

Ⅱ. D 最も多く読む種類

種 類	年 次		計
	I	Ⅲ・Ⅳ	
1. 音 楽 書〔2項まで可〕(内訳不明)	3人	5人	8人
イ 音楽史関係(伝記類を除く)	10内7%	33内14%	43内11%
ロ 伝 記 類	21 14%	44 18%	65 17%
ハ 評論・研究書関係	18 12%	27 11%	45 12%
ニ 随筆・随想・紹介文・紀行文など	36 25%	46 19%	82 21%
ホ 音楽理論関係	9 6%	17 7%	26
ヘ 実技指導書の類	21 14%	40 17%	61 16%
ト 解説書の類	26 18%	27 11%	53 14%
チ その他()	1	3	4
2. 一般文学書(内訳不明)	3	10	13
イ 日本文学(小説)	56内25%	88内28%	144内27%
ロ 外国文学(小説)	133 58%	178 57%	311 58%
ハ 詩	28 12%	30 10%	58 11%
ニ 劇 作	6	2	8
ホ その他()	2	4	6
3. (内 訳 不 明)	4	5	9
イ 哲学書・人生論など	14	26	40
ロ 一般芸術論・文学論など	11	20	31
ハ 宗 教 関 係	11	17	28
ニ 歴 史 関 係	10	13	23
4. 一般の随筆や記録ものなど	17 6%	22 6%	39 6%
5. 科 学 書	4	2	6
6. そ の 他 ()	2	4	6
無 回 答	25	21	46
学 生 実 数	284人	355人	639人

△年次別—男女共▽

(注) 1~6は何れか1つのみ指摘を予定したが、2つ以上マークした者が多く、%の合計はI年次が約16割、Ⅲ・Ⅳ年次が20割となった。

上掲諸種目の中では、多く読まれる種類は、年次を問わず1位=文学書、2位=音楽書、かなり隔って3位=其他の諸種 となっている。何れも率は上級年次に増加する。音楽書については、I年次では、随筆・紀行類・解説書・伝記或いは実技指導書・評論・研究書の順に多く読まれ(気楽に読めるものや直接実効を目指すものに傾くと解せられる)、Ⅲ・Ⅳ年次では、随筆・紀行類・伝記・実技指導書・音楽史・評論・研究書又は解説書の順に多く読まれている。又どちらも、音楽理論関係は最低率である。

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

上級学年に増加するものとしては、音楽史・伝記・実技指導書があり、減少するものは、随筆類、解説書である。又、先にⅡF項に於て、専門以外では人文科学関係科目に興味あるものが多いことを見たが（全体で4割近く）、本項の3の低率からすれば、それも多くは自ら求めて読書する程積極的ではない様にも思われる。

X 一般社会的関心などについて

- A 現代の国際情勢に対する関心（例えばベトナム問題やE E Cなど）
- B 日本の社会情勢や政治の動きに対する関心

	A	B
1. 大いにある	18%	22%
2. 多少ある	56%	52%
3. あまりない	19%	17%
4. 殆どない	3%	2%
5. よく知らない	3%	2%
無回答	1%	5%
学生実数	639人	639人

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ年次全員

AではⅠ年次とⅢ・Ⅳ年次別に見ても殆ど差異はない。
 Bでは1……Ⅰ年次=24%>Ⅲ・Ⅳ年次=21%
 2……Ⅰ年次=48%<Ⅲ・Ⅳ年次=52%、他は同様
 なお、今回は果せなかったが、一般大学生と対照して検討を試みたいと考える。

C 現在一番コンプレックス（不安や重荷）を感じていること

- 1 学習上の問題……イ 専攻技術の能力について、ロ 諸教科の学習について、ハ 指導者（教師）に関する問題、ニ その他、
- 2 人生上の問題……イ 異性との愛情問題、ロ 友人（同性）に関する問題、ハ 人生の意義に関する悩み、ニ 社会的、国際的の不安に関する悩み、ホ 信仰の問題、ヘ その他、
- 3 生活上の問題……イ 健康の問題、ロ 学資の問題、ハ 住居の問題、ニ その他、
- 4 特にない、又は不明

1. 2. 3. 4. 項につき何れか1つを選ぶべきところを2つに亘り記入した者が多かったため、データが混乱したので、その各項毎に概要のみ示せば次の通りである。

- 1. 学習上の問題については、男子での5.5割を除き、何れの場合もその約7割（上級年次では8割近く）が、イ、「専攻技術の能力について」に集中している。
- 2. 人生上の問題については、ハ、「人生上の意義に関する悩み」が、半数前後を占める。（之も上級年次では6割に増加）なお、全員について1. 2. 3. 4. の学生実数に対する比率は（100をこえるが）夫々66%、41%、20%、21%であった。
 その他、著しく傾向の異なる例としては、2.（人生上の問題）の指摘が男子67%に対して女子40%と開きのあることがあげられる。

D 宗教（信仰）についての考え方

- | | | |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 現代人の生活にとって宗教は必要と思う 2 " " あった方がよいと思う 3 " " あってもなくてもよい 4 " " 不必要と思う | } | <ul style="list-style-type: none"> イ 現在信仰をもっている……(1) 仏教, (2) キリスト教, (3) その他 () ロ はっきりとした信仰はないが同情的である (傾向性をもつ) ……(1) 仏教的, (2) キリスト教的, (3) 一般的, (4) その他 () ハ 信仰の立場は理解出来るが、自分自身は現在もたない ニ 信仰ということに懐疑的である ホ 信仰を否定する ヘ 信仰ということに無関心である |
|---|---|---|

音楽大学生のヴィジョン——傾向性の調査

上記のアンケートの左側を「宗教に対する考え方」（その1）、右側を「自身の信仰の立場」（その2）と区分して、いわゆる宗教関係校とそれ以外との別に示せば次の如くである。

（その1）

	宗教関係校 (女子)	非宗教関係校			計
		男子	女子	計	
1. 現代人の生活にとって宗教は必要と思う	92人 33%	15人 25%	50人 17%	65人 18%	157人 25%
2. "あった方がよいと思う	123 45%	17 28%	98 32%	115 32%	238 37%
3. "あってもなくてもよい	47 17%	18 30%	122 40%	140 39%	187 29%
4. "不必要と思う	4	7	15	22 6%	26 4%
無 回 答	10	3	18	21	31 5%
合 計 (学生実数)	276人	60人	303人	363人	639人

宗教関係校は他方に比して1,2項の比率が明かに高い。

非宗教関係校に於ては、女子よりもむしろ男子の方が、やや「必要(肯定)」の方に傾く。又宗教関係校に於て、4.「不必要」は僅少だが、3.「あってもなくてもよい」が、なお17%存在することに留意を要する。

（その2）

	宗教関係校 (女子)	非宗教関係校			計
		男子	女子	計	
イ1 (信仰有) (仏教)	13人	1人	7人	8人	21人
2 (〃) (キリスト教)	21 } 38人 14%	6 } 9人 15%	27 } 39人 13%	33 } 48人 13%	54 } 86人 13%
3 (〃) (その他)	4	2	5	7	11
ロ1 (同情的) (仏教的)	25	2	13	15	40
2 (〃) (キリスト教的)	44 } 94人 34%	7 } 11人 18%	35 } 69人 23%	42 } 80人 22%	86 } 174人 27%
3 (〃) (一般的)	23	2	20	22	45
4 (〃) (その他)	2	0	1	1	3
ハ (理解出来るが不有)	132 48%	29 48%	140 46%	169 47%	301 47%
ニ (懐疑的)	4	3	15	18	22
ホ (否定)	1 } 12人 4%	3 } 9人 15%	7 } 49人 16%	10 } 58人 16%	11 } 70人 11%
ヘ (無関心)	7	3	27	30	37
無 回 答	0	2	6	8	8
合 計 (学生実数)	276人	60人	303人	363人	639人

現在信仰をもっている者の数は両グループ共ほぼ同率であり、又(ハ)も大体同様である。(その1)に於て見られた1,2項の比率の相異は、ここでは、(ロ)「同情的～傾向性あり」(或いはその裏面たるニ、ホ、ヘ)の相異と相関的であることを確認出来る。

更に、前項(その1)と、先のⅧB項(芸術の必要性)とを対照してみると、芸術が必要乃至必然的存在と考える者(93%)の絶対多数に比して、宗教のそれがかなり低いことは、現代の一般的社会状況を反映していると思われるが、併し乍ら、人間にとって両者何れも必然的なるものとの見地からすれば、やはりここにも問題はあると言うべきであろう。

6. 結 び

以上、アンケートの各項毎に一応第一次的な集計を示したが、かかる調査資料が如何なる意義をもつかについては、概ね次のように考えられる。まづ、平素われわれが折にふれ個々の経験として任意にもっている、音楽学生の現状諸傾向に対するイメージや感想を、統計的に明かにすること。そして、教育学的立場において、例えば

(1) 音楽学生が、要求され期待される一般的、基礎的な素養に対して、又一个の学生一人の青年として、どのような状況を示しているかを認識すること。

(2) そこから、将来いろいろな意味で音楽社会乃至音楽活動の一大中心勢力形成の要因となる音楽学生が、又ひいてはその教育機関たる音楽大学において、教育上考慮を払うべき諸問題（偏向や弱点や促進すべき諸点）は一体どのような点に在るか、等の確認。

(3) 一般教育としての音楽教育と、所謂専門教育との区別や紐帯を奈辺に見出したらよいか、等の検討の資料とすること。 その他

(4) 音楽大学や教員養成を目的とする大学の入試選考制度・内容の改善の参考資料として、等々の事柄が考えられるであろう。（因みに、敢えてかく言うのは、例えば昭和40年度、東京で開催された国際大学長会議の席上、我国の大学入試制度が欧米のそれに比して、数十年の遅れを示しているとの指摘がなされた、といわれる点一朝日新聞報道—に思い到るからである。音楽大学に於てもかかる事情は夙に改善を要する段階に來ていると考えるのは、単に筆者のみの思い過ごしであろうか。）

後 記

本調査の集計作業は、相愛女子大学音楽学専攻の昭和40年度音楽教育学ゼミナールにおいて、主として所属学生（小野和恵、小森文子、高谷洋子、辻野徳子、辻橋佳子）および筆者によって行われた。その他部分的に数名の有志学生の協力を得た。

調査結果の概要は、昭和40年度音楽学会全国大会に於て発表されたが、ここに（二、三の項を除く）殆どすべてのデータを掲載した。

なお、今回の調査に当っては、関係大学のすべてにおいて夫々の諸教授から極めて積極的な協力をいただいたこと、及びアンケートを依頼した学生諸君が、通例のものに比し甚だ多量で煩わしいにも拘らず甚だ真面目な態度を以て回答を与えて下さったことを感謝して附記する次第である。